

「私たちの十五歳の頃」

東日本大震災から5年目に入ります。私たちの住む会津地域には双葉郡から多くの人が避難してきました。私たちは、生まれた土地に育ち住んでいます。いま避難している人には、「ふるさと」はまだまだ遠くにあります。

今回、大熊町地域学習応援協議会の事業として、大熊のみなさんの十五歳のころを聞き書きしました。それは、大熊の子どもたちに地域の事、そこに住んできた「思い」を理解して欲しかったからです。

この事業は、会津大学短期大学部の学生と、特定非営利活動法人寺子屋方丈舎のスタッフが聞き書きを行いました。大熊の子どもたち、そして、地域のみなさんの何らかの記録になれば幸いです。

主催…大熊町地域学習応援協議会

2014年(平成26年度)文部科学省

学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業(委託事業)



語り手
片倉 莊次さん
(66歳・下野上3区)

大熊での10代の頃の思い出

私、実はもうひとつ名前があるんですよ。「清司」です。この名前は、小学校に上がった時のもの。『莊』が葬式に使うあまり良くない字だからって。親から入学前日に「おまえ明日から『清司』だからな」って。そこからずっと、地元の人のは「清司」。社会人になって、「莊次」に戻ったんですよ。役場登録が届出のままだから書類はそう書かなくちゃいけない。それで

手作業だったし、毎日来いよーって言われていたしね。まあ、今思えば体鍛えられてよかったのかなとは思いますが。

大熊には統合するまで大野村の「大野小学校」と熊町の「熊町小学校」の2つがあつて、われわれのときは、45人の3クラスありました。あの頃は給食がなくて弁当のない子はお昼が終わるまで外で待っているような時代。みんな思いやりがあつたんだと思うんです。貧乏だからっていじめはなかったですね。まあ、喧嘩はしましたけど。集落のグループ同士、広場で取っ組み合いするときもありました。みんな小刀も持ってましたけど、絶対に使わないで、素手で、近くの親父さんに怒られて(笑)。

中学校は大野中学校です。中学の3年間は、家族と離れて、隠居していた祖父を介護しながら暮らしていました。代教員だった祖父は考え

2つの名前で呼ばれてるんです。

子供の頃はまあ悪ガキでした。ジャガイモかっぱらって焼いて食べたり、自分とこでも作つたのに梨はよそから(笑)。リンゴに梅に柿に。後でとても怒られましたけど(笑)。戦後は食べ物が無かったからね。あとは、グミとか桑イチゴとか。夏は魚捕って焼いたし、冬は小鳥を罠で獲って食べることもできた時代です。

原発建設前、双葉郡はチベットのような過疎地だった。松林は開墾して梨園に、田んぼも今ほど米もとれないし冬場は出稼ぎ。だからこそ、当時の町長は原発を誘致したんでしよう。もちろん反対者もいましたよ。私が小学生のころ、筵旗に「原発反対」と、今でいえばデモみたいに歩いている人もいました。

うちは農家で梨作ってたんで、とにかくその手伝いが多くて嫌だった。昔は機械が無いから方が進んでいて、すごい影響を受けました。『自分の意見をしっかり言う』とか『自分で改革しなければ』とか。おかげでものすごく独立心が強くなって、中学卒業後は東京に就職しました。人生は挑戦ですね！それには①自分の考えをしっかり持つこと。②自分が本当に楽しめる目標を持つこと。③腹を割って話せる友達・ケンカもできる友達を持つこと、も、すごい大事なんですよ。あとは、物事の道順を守ったりやっちゃいけないことなどルールを守ること。祖父の影響が強いですけど、今も私の人生の道しるべにしています。



聞き手
大竹 佑佳さん
(NPO法人寺子屋方文舎)

呼び名が2つある片倉さん。でも、ココロは1つ、まっすぐな人だなあと思いました。会津で生まれて農家でもない私には、新鮮で発見が多いお話でした。